



尾崎翠全集

創樹社

尾崎翠全集 全一卷

定価 5800円

発行所 株式会社創樹社

東京都文京区湯島 2-2-1

電話 東京 815-3331(代表)

振替 東京 2-154580

編者 稲垣真美

装釘 野中ユリ

本文印刷 松沢印刷

装本印刷 広 陵

製函 山崎紙器

製本 美行製本

1979年12月5日初版第1刷発行

©1979年 早川 薫

0395-0121-4249

尾崎翠全集
目次

I 作品(一)——完成期

第七官界彷徨 11

歩行 96

こほろぎ嬢 110

山村氏の鼻 126

詩人の靴 133

匂ひ——嗜好帳の二三ハエチ 141

ゲエテ閣下 チエホフ小父さん 147

レル親爺さん

捧ぐる言葉——嗜好帳の二三ハエチ 147

カイゼル 佐藤春夫氏

木犀 154

アツプルバイの午後 160

新嫉妬価値 175

途上にて 179

地下室アントンの一夜 196

作品(二)——中期

無風帯から 215

松林 274

花東 283
初恋 295

II 評論・随想・詩

映画漫想(一) 305

画面への漫想家の心理 影への隠遁 声画 武蔵野館第
四階 「アスファルト」「嫉妬」など

映画漫想(二) 314

杖と帽子への愛 声画の自殺 線香の煙ジョセフィン(瘦
軀礼讃) 時のもの二つ

映画漫想(三) 324

驚の美 時のもの

映画漫想(四) 333

見たもの一束 オリガ・クニツベル・チエホフのこと

映画漫想(五) 343

時のもの、そのほか

映画漫想(六) 350

夏の映画は犬も喰はぬこと 「ホオゼ」のこと その他一
束

杖と帽子の偏執者——チャアライ・チャツプリンの二つの作品について
神々に捧ぐる詩(詩一篇) 365

チャアライ・チャップリン 365

キリアム・シヤアブ 366

春の短文集 374

1 春の儉安 374

2 電文 374

3 斑点症 375

新秋名果——季節のリズム 376

「第七官界彷徨」の構図その他 382

Ⅲ 初期作品集

青いくし 389

漁村の新生活より 390

あさ 391

朝 392

雪のたより 395

草に坐りて 396

冬にわかれて 397

豆畑から 399

宵 400

昼の淋しさ 401

宵のたより 402
悲しみの頃 403
海ゆく心 412
ねざめ 415
仮睡の頃 416
悲しみを求める心 417
夏逝くころ 419

Ⅳ 短歌・童話・翻訳・書簡・拾遺

短歌 つかの間に……(一首) 427
短歌 木蓮(五首) 428
短歌 富春園にて(九首) 429
岩井の里(里謡二篇) 430
岩井の里 430
盆踊り 432
素木しづ子氏に就いて 434
「蒼馬を見たり」評 437
杉森留三氏のこと 439
「異性間の友情について」——アンケート 442
少女ララよ——伝奇物語 443

エドガア・アラン・ポオ作「モレラ」——翻訳 458

書簡(九通) 467

解題・校異(稲垣真美・田中禎孝) 483

年譜(稲垣真美・日出山陽子) 499

付録参考評論(作家論・作品論)

尾崎翠回想——「落合町山川記」抄他一篇(林芙美子) 513

現実に関する二三の反省——尾崎翠女史の文学に関心しつつ(白川正美) 518

尾崎翠頌——三篇(花田清輝) 523

女流作家尾崎翠の終焉(稲垣真美) 533

歩行する辭——尾崎翠について(山田稔) 536

解説Ⅱ 稲垣真美 543

装釘Ⅰ 野中ユリ

尾崎 翠全集 全一巻

編集・校訂について

一、本全集には、現在判明している尾崎翠の全作品・翻訳を収め、晩年の書簡九通を付載した。

一、座談は収録しなかった。

一、底本として、「第七官界彷徨」は啓松堂刊の単行本、「歩行」は『文学クオタリイ』所載のものを用い、他はそれぞれの発表誌・紙に拠った。

一、校訂に当って、漢字は当用漢字にあるものは新字体に改めたが、用字・仮名遣い・送り仮名などは、原則として底本のままとした。したがって、「縁喜」(縁起)「閑素」(簡素)など作者独特の用字はそのまま残し、また、仮名遣いも「はいる」(入る—本来ならば「はひる」と表記すべき)などのように、いわゆる歴史的仮名遣いから外れたものも底本どおりに残した。

ただし、明らかな誤植(脱字・衍字を含む)は訂正した。また、変体仮名の類は通行の字体に改め、外国語の片仮名表記および送り仮名など同一作品内で統一したものがいくつかある。

句読点は、原則として底本のままとしたが、行末で文が切れる場合などでそれが付けられていないものには補った。

振り仮名(ルビ)については、総ルビの作品がいくつかあるが、ごく少数を残して省略した。

「書簡」には句読点が付けられていないが、読みやすくするためにそれを施した。

一、「第七官界彷徨」「歩行」には、解題のあとに校異欄を設けて、本全集収録の本文と、初出・再録本のそれとの間の異同を示した。

I
作
品
①

第七官界彷徨

よほど遠い過去のこと、秋から冬にかけての短い期間を、私は、変な家庭の一員としてすごした。そしてそのあひだに私はひとつの恋をしたやうである。

この家庭では、北むぎの女中部屋の住者であつた私をもこめて、家族一同がそれぞれに勉強家で、みんな人生の一隅に何かの貢献をしたいありさまに見えた。私の眼には、みんなの勉強がそれぞれ有意義にみえたのである。私はすべてのものごとをそんな風に考へがちな年ごろであつた。私はひどく赤いちぢれ毛をもつた一人の瘦せた娘にすぎなくて、その家庭での表むぎの使命はといへば、私が北むぎの女中部屋の住者であつたとほり、私はこの家庭の炊事係であつたけれど、しかし私は人知れず次のやうな勉強の目的を抱いてゐた。私はひとつ、人間の第七官にひびくやうな詩を書いてやりませう。そして部厚なノオトが一冊たまつた時には、ああ、そのときには、細かい字でいつばい詩の詰まつたこのノオトを書留小包につくり、誰かいちばん第七官の発達した先生のところへ郵便で送らう。さうすれば先生は私の詩をみるだけで済むであらうし、私は私のちぢれ毛を先生の眼にさらさなくて済むであらう。(私は私の赤いちぢれ毛を人々にたいへん遠慮に思つてゐたのである)

私の勉強の目的はこんな風であつた。しかしこの目的は、私がただぼんやりとさう考へただけのことで、その上に私は、人間の第七官といふのがどんな形のものかすこしも知らなかつたのである。それで私が詩を書くのには、まづ第七官といふものの定義をみつけない次第であつた。これはなかなか迷ひの多い仕事で、骨の折れた仕事なので、私の詩のノオトは絶えず空白がちであつた。

私をこの家庭の炊事係に命じたのは小野一助で、それに非常に賛成したのはたぶん佐田三五郎であつたらうと思ふ。なぜなら、佐田三五郎は私がこの家庭に来るまでの三週間をこの家庭の炊事係としてすごし、その三週間はいろいろな意味から彼にとつてずるぶん惨めな月日で、彼は味噌汁をも焦がすほどの炊事ぶりをしたといふことであつた。この家庭の家族は以上の二人のほか小野二助と、それに私が加はり、私は合計四人分の炊事係であつた。みなの姓名を挙げたついでに、私は私自身の姓名などについて言つておかう。私は小野一助と小野二助の妹にあたり、佐田三五郎の従妹にあたるもので、小野町子といふ姓名を与へられてゐたけれど、この姓名はいへんな佳人を聯想させるやうにできてゐるので、真面目に考へるとき私はいつも私の姓名にけむつたい思ひをさせられた。この姓名から一人の瘦せた赤毛の娘を想像する人はないであらう。それで私は、もし私の部厚なノオトが詩でいつばいになつたときには、もうすこし私の詩か私自身かに近しい名前を一つ考へなければならぬと思つてゐた。

私のバスケットは、私が炊事係の旅に旅だつ時私の祖母が買つてきたもので、祖母がこのバスケットに詰めた最初の品は、びなんかづらと桑の根をきざんだ薬であつた。私の祖母はこの二つの薬品を赤毛ちぢれ毛の特効品だと深く信じてゐたのである。

特效薬を詰め終つてまだ蓋をしないバスケットに、私の祖母は深い吐息をひとつ吹きこみ、そして私にいつた。「びなんかづら七分に桑白皮三分。分量を忘れなざるな。土鍋で根気よく煎じてな。半分につまつたところを手ぬぐひに浸して——いつもお婆あさんがしてあげるとほりぢや。固くしぼつた熱いところでぢれを伸ばすのぢや。毎朝わすれぬやうに癖なほしをしてな。念をいれて、幾度も手ぬぐひをしぼりなほしてな」

祖母の声がしめつぽくなるにつれて私は口笛を大きくしなげればならなかつた。しかし私の口笛はあまり利目になかつたやうである。祖母はもうひとつバスケットに吐息を吹きこみ、そして言つた。

「ああ、お前さんは根が無精な生れつきぢや。とても毎朝は頭の癖なほしをしてくれぬぢやろ。身だしなみもしてくれぬぢやろ。都の娘子衆はハイカラで美しいといふことぢや」

私は吹いてゐる口笛がしぜんと細くなつてゆくのをとどめることが出来なかつた。私は台所に水をのみに立つて、事実大きい茶碗に二杯の水をのみ、口笛の大きさを立てなほすことができた。

私がいばらく台所で大きい口笛を吹いて帰つてくると、祖母は涙を拭きおさめて、一度バスケットにつめた美髪料をとりだし、二品の調査を一包みづつに割りあててあるところであつた。障子紙を四角に切つた大きい薬の包み一つ一つ作つてゆきながら祖母は言つた。——さうはいつても、都の娘子衆がどれほどハイカラで美しいとて人間は心ばえが第一で、むかしの神さまは頭のぢぢれてゐた神さまほど心ばえがやさしかつたといふではないか。天照大神さまもさぞかしぢぢれたお髪をもつてゐられたであらう。あにさんたちのいふことをよくきいて、三五郎とも仲よくくらしして……そして私の祖母は私の美髪料の包みのなかに涙を注いだのである。

私のバスケットはそんな風でまだ新しすぎたので、それをさげた佐田三五郎の紺がすりの着物と羽織を、かな

り古びてみせた。三五郎は音楽受験生で、翌年の春に二度目の受験をするわけになつてゐたので、彼の後姿は私の眼にすこしうらぶれてみえた。しかし私は三五郎のこんな後姿を見ない以前から、すでに彼の苦しみと同感をもせてゐた。三五郎は国もとの私にいくたびか手紙をよこし、受験生のうらぶれた心もちを、ひどく拙い字と文章とで書き送つてゐたのである。

三五郎と私が家に着いたとき、家のぐるりに生垣になつてゐる蜜柑の木に、さしわたし四分ばかりの蜜柑が葉と交りのないほどの色でつぶつぶとみもり、太陽にてらされてゐた。この時私ははじめて気がついた。私の手には蜜柑の網袋がひとつ垂れてゐて、これは私が汽車のなかでたべのこした一袋の蜜柑を、知らないではだかのまま手に垂らして来たものである。それにつけても、この家の生垣は何と発育のおくれた蜜柑であらう。——後になつてこの蜜柑は、驚くほど季節おくれの、皮膚にこぶをもつた、種子の多い、さしわたし七分にすぎない、果物としてはいたつて不出来な地蜜柑となつた。すつばい蜜柑であつた。けれどこの蜜柑は、晩秋の夜に星あかりの下で美しくみえ、そして味はすつばくとも佐田三五郎の恋の手だすけをする廻りあはせになつた。三五郎はさしわたし七分にすぎないすつばい蜜柑を半分たべ、半分を対手にくれたのである。しかし三五郎の恋については、話の順序からいつても、私は後にゆづらなくてはならないであらう。

このやうな生垣にとり巻かれた中の家といふのは、ひどく古びた平屋建で、入口に張られた三枚の名刺が際だつて明るくみえるほどであつた。小野一助、小野二助、佐田三五郎の三枚の名刺は、先に挙げた二枚だけが活字で、三五郎の分は厚紙に肉筆で太く書いた名刺であつた。「受験生とは淋しいものだ。一度受験して二度目にも受験しなければならぬ受験生はより淋しいものだ。こんな心もちは小野一助も、二助も、とつくに忘れてゐるだらう。小野町子だけが解つてくれるだらう」と私に書き送つた佐田三五郎は、彼自身の名刺の姓名だけでも筆太